

ヨーロッパにおける高等教育改革 (Bologna Process) - ECTS¹ と Learning Outcome の果たす役割

堀 田 泰 司

I. はじめに

欧州委員会が推進する ERASMUS (European Community Action Scheme for The Mobility of University Student) という教育交流事業において、ECTS が実際にどのように利用されているか、ベルギー、オランダ、フランス、スペインの政府関係機関並びに大学を訪問し研究調査²を行った。その結果、ECTS は、もはや学生交流だけの単位互換制度という枠を超え、ヨーロッパの高等教育改革の柱となっている Bologna Declaration (ボローニャ宣言) に基づき、高等教育機関の正規の単位制度になろうとしていることが判明した。また、さらに ECTS と共に教育の質保証の観点から導入が進められている Diploma Supplement³ や Learning Outcome⁴ も確実にその開発と普及が進んでいることが判明した。特に、ECTS と Learning Outcome のカリキュラム開発への導入は、科目ごとの Learning Outcome や実質的時間数 (workload) を明確化することによって、学生や社会に対し、高等教育の質保証 (Quality Assurance) を確実に実現化しようとしている。現段階では、まだ、課題も多くこうした計画がどれだけ実現できるのか不確かな部分も多いが、政府と高等教育機関の積極的な参加がこのまま継続するのであるならば、その成果は十分に期待できるであろう。

II. 調査方法

調査は、2005年の2月から3月に行われ、ベルギーでは、欧州委員会 (European Commission) の ERASMUS や ECTS を担当する事務局、ベルギー ERASMUS 国内事務局そして、北部に位置するアントワープ大学並びにアントワープ大学を訪問した。両校は、昨年、欧州委員会が ECTS Label Institution として認定した ECTS を全学的に単位制度として導入した13大学のうちの2校であり、どのように全学的に ECTS 制度を導入したかその経緯を聞くことができた。そして、オランダでは、オランダ ERASMUS 国内事務局並びにフローニンゲン大学、ハンズ高等専門教育大学 (HBO)、そして、アムステルダム大学を訪問した。フローニンゲン大学では、現在、ヨーロッパ全域で推進されている重要な活動である Tuning プロジェクトの代表者の1人である教授と対面することができ、Tuning プロジェクトの概要について説明を受けた。その後、フランスのボルドーへ移動し、フランス ERASMUS 国内事務局とボルドー第1、第2、第3、第4大学の全てを訪問した。そして、スペインのマドリッドでは、スペイン ERASMUS 国内事務局、レイ・ファン・カルロス大学、マドリッド自治大学を訪問し、スペイン北部のビルボアでは、バスク・カウ

ントリー大学、デウスト大学を訪問した。デウスト大学では、Tuning プロジェクトの2人目の代表者である国際担当副学長とも会談することができ、Tuning プロジェクトの活動状況と今後の計画について情報を収集した。本稿は、そうしたフィールド調査で収集された資料並びにインタビューで得られたデータを基に分析した調査研究である。

III. 教育交流における ECTS の発展

ERASMUS は、欧州委員会 (European Commission) が支援するヨーロッパの高等教育交流プログラムであり、1987年に12カ国の学生交流から始まり、現在では、毎年12~12万5千人もの学生が交流している。⁵ ECTS は、そうした学生交流のために開発された単位互換制度である。ECTS は、ヨーロッパ諸国の異なった単位数を全て1年間60単位 (1500~1800時間の学修時間) に換算し互換しようとする制度である。この換算方式を利用することによりどの国の単位制度でも相互に単位互換が可能となり、学生交流の促進に効果的であったため、ECTS を何らかの形で利用する学部や大学は、15年間の ERASMUS 活動の中で非常に増えた。しかし、同時に ECTS の成績証明書を正式に発行し利用している大学は、現在もヨーロッパ全体でまだ1000校程度に留まっている。また、その1000校の高等教育機関も国、大学によってばらつきが激しく、多くの場合、全学的ではなく、利用する学部と全く採用していない学部がはっきり別れているのが現状である。⁶ ただ、大がかりな学生交流を担当するコーディネータは、ECTS を非常に評価しており、ECTS の使用により、それまでの煩雑な単位互換の手続きは、かなり簡素化され、単位互換をよりスムーズにできるようになったのは事実である。

IV. Bologna Process における ECTS と TUNING プロジェクトの発展と役割

ECTS は、ERASMUS の学生交流を促進するために有効な単位互換としてヨーロッパ全土に普及していった。しかし、1999年6月19日に、イタリアのボローニアで開催された教育大臣会議以降、新たな活用方法が期待されるようになった。この会議には、ヨーロッパ地域の29ヶ国の教育大臣が集い、ヨーロッパ全体の高等教育の質の向上と世界的な競争力の強化に向けて各国が協力しあいながら、さまざまな改革計画を検討していくことを誓い、共同で「ボローニア宣言」を提唱した。⁷ 具体的な改革案は以下の6つで、2010年までに達成しようという計画であった。

- 1 ヨーロッパ全体で通用するような共通の学位制度の確立
- 2 学部と大学院の2つのサイクルを持った大学システムの確立
- 3 ECTS のような単位認定システムの確立
- 4 学生と教官の交流の促進
- 5 高等教育の質と共通性・互換性の向上と協力体制の構築
- 6 「ヨーロッパ」的視点/思考を取り入れた高等教育開発の推進

そして、この宣言内容を実現するために、ヨーロッパ諸国の教育大臣は、その後も2年おきに合同会議を開催し、2001年には、プラハに33カ国の教育大臣が集い、ボローニャ宣言の継続的な推進を確認すると共に、ヨーロッパ高等教育地域 (European Higher Education Area) における生涯教育と学生の参加の重要性を認識し、ヨーロッパの高等教育の国際的な競争力強化を目指した。⁸ こうしてヨーロッパ全体の高等教育大改革を Bologna Process と称した。2003年のベルリン会議では、ボローニャ宣言の計画の中でも、特に高等教育の質保証システムの構築、教育課程の学士号と修士号への区分化 (2サイクルシステム) の実現、そしてヨーロッパ域内の学位と修学期間の共通化による相互認識を2005年までにある程度達成することを目標とし、さらに、博士課程後期を含めた3つのサイクルシステムの検討、並びにヨーロッパ高等教育地域における研究地域 (the European Research Area) の役割の検討にも合意した。また、最近では2005年5月にノルウェーのベルゲンで大臣会議が開催され、さまざまな組織・団体による中間評価報告書が提出され、2サイクルシステムやECTS、そして質保証 (Quality Assurance) 活動等の普及に関しては、当初の計画が順調に進んでいることを確認した。

こうした一連の教育大臣会議において、ECTS は、ヨーロッパ全体の高等教育における単位制度として認定され、参加国の教育制度の整備と共に公式な制度として普及しつつある。そして、ベルギーやオランダなどでは、国の正式な単位制度として法令化された。さらにECTSを全学的に制度化し、全学のカリキュラムを英語によって公開する大学を欧州委員会は、ECTS label institution として認定し、ECTSの制度化を奨励した。

さらに、ECTSの普及と共に、2000年には欧州委員会の支援を受け、オランダのフロンニンゲン大学とスペインのデウスト大学が中心となり、“Tuning Educational Structures in Europe”パイロットプロジェクト (以下、Tuning プロジェクト) を発足させた。Tuning プロジェクトは、Bologna Processの改革計画であるヨーロッパ全域における共通性、互換性の高い学位、2サイクルシステム、そして単位制度 (ECTS) の実現を支援するために、それぞれの専門教育における学位別、さらに学年別の学修成果に関するガイドラインを構築することを目的とした。それは、教育大臣主導で推進されていた Bologna Process に対し、教員側のイニシアティブによって作られる新しい視点からの改革計画であった。そして、そのガイドラインは、専門分野ごとにヨーロッパ全域に点在する専門家組織 (主に学会) のメンバーである著名な教員を集め、何回にも互る会議で十分に検討された上で作成された。さらに、もう1つの特徴としては、Learning Outcome は、どの分野の専門教育であっても、あくまでも雇用機会の増加を目指した実践的な知識、能力に重点を置いた到達目標であると同時に、科目やコースの修了時点で学生がどのような知識、能力を身につけることができるか大学が学生に対し保証する教育効果の質保証の役割を持つ点である。

第1期プロジェクト (2000-2002年) では、経営学、教育学、地質学、歴史、数学、物

理、そして化学が選ばれ、約100校の参加の下に、それぞれの分野の学年ごとの Learning Outcome が作成に向け検討が進められた。Learning Outcome は、それぞれの学年を修了した段階で全ての分野の学生ができるようにならなければならない例えばコミュニケーション能力やリーダーシップのような generic competences⁹と専門教育における学年ごとの subject competences¹⁰に分けられ、ガイドラインが検討された。その後も Tuning プロジェクトは継続され、第2期（2003-2004年）では、ヨーロッパ研究と看護学の専門教育が検討対象に加えられ、現在は、第3期の Tuning プロジェクト（2005-2006年）が開始され、上記の9分野以外の全ての分野でガイドラインの作成が検討されている。

V. ECTS と Learning Outcome の特徴と期待できる効果

ECTS の特徴と効果：ECTS の特徴とその効果は、第1に、ヨーロッパの単位制度の透明性(Transparency)を向上させた点であろう。それによって、どの大学の単位であっても、互換が可能となり、交換留学だけでなく、編入学や生涯教育にも対応しうる単位認定制度をヨーロッパの高等教育にもたらした。そして、バルゲン会議では、将来的に ECTS の単位読み取り方式を活用し、学生の就労中に受けた研修やインフォーマルな教育の経験をも単位に換算し直し、ヨーロッパの労働者の高等教育への参加を促そうとする計画も検討されつつある。また、欧州委員会 SOCRATES-ERASMUS 担当局長は¹¹、「今後2サイクルシステムが定着した場合、修士号を他の大学で取得しようとする学生が増えてくるので、そうした学生の移動を利用してより多くの学生を獲得しようとする大学には、ECTS 制度の導入は、必要である」と述べた。さらに、「ヨーロッパの人口は減っているので、やがて学生の獲得合戦が始まる。そのとき、生き残れるかが問題である。こうした状況は、ヨーロッパ各国の学長は、よく理解しているので、これだけ積極的に参加しようとする大学がいるのだ」と言及した。

第2の特徴と効果は、ECTS は、教員が行う授業時間数に基づく制度ではなく学生が実際に学修に費やした全ての時間数を基に計算される加算式単位制度 (Credit system for accumulation)¹²である点であろう。ECTS の単位数は講義の時間数だけでなく、宿題や試験、レポートの作成、そして自宅での自習時間数等も綿密に計算された実質的な総合学修時間数 (study workload) で算出されている。1 ECTS 単位は、25~30時間の workload として換算される。また、大学によっては、より正確に算出するために学生に実際にどの程度自宅で勉強しているかなどの調査も行っている。バルゲン会議で提出された欧州学生自治組織連合 (National Unions of Students in Europe) の提言書によると、ECTS を使用しない多くの大学では、単位制度は多様化しており、1つのモジュールでも2から30ECTS 単位とその幅は広い。¹³また、ある大学では、教官間の平等性を保つために、学習時間数が大幅に異なる科目であっても、同じ単位数であり、中には、必須科目であるにも関わらず、単位の全くない科目等も未だに存在するようである。ECTS は、こうした今までの単

位数のずさんな算出方法を是正し、学生が実際に費やした時間数を基に単位数が算出される workload を重視した単位制度である。単位数が実際に費やした学修時間数を証明することによって、その互換性を向上させ、進学、編入学、留学、そして就職においても、学生は、より公平な判定を受けることができるようになる。

Learning Outcome の特徴と効果：Learning Outcomes の最大の特徴と期待できる効果は、教育内容に関する情報が対外的に明確になるということである。また、Tuning プロジェクトが推進する分野ごとの学修成果に関するガイドラインは、ヨーロッパ全域の専門教育の最低限の質の維持と共通性を持たせると共に、卒業生の雇用者に対する教育の質保証を実現する重要な指標となる点である。¹⁴ また、教員にとっても期待される教育効果が明確になることによって、カリキュラムのデザインがしやすくなると同時に学生にとってもどのような視点から成績評価が行われ、修了後には、どのような知識や能力が身につけていなければならないのか理解しやすくなることも重要な効果といえよう。しかし、教育の質保証という観点からは、Learning Outcome だけの使用は、そうした目標に対し、学生は、どれだけの学修時間を費やさなければならないのか明確な尺度は分からないため、ECTS との融合による活用がより有効的である。

ECTS と Learning Outcome が併用された場合の効果：ECTS は、単位の換算方式であるので、教育の質や内容については、何も情報を提供できないが、Tuning プロジェクトによって開発された Learning Outcome と併用することによって、専門分野別教育レベルごとの教育内容の概要と履修科目ごとの学修時間数と具体的な教育成果を学生や社会は、知ることができるようになる。¹⁵ また、反対に、ECTS は、単なる単位数というだけでなく、学生がどれくらい就学時間に費やしているのか判断するのにとても重要な尺度にもなる。例えば、ECTS の 1 単位は、およそ 25 時間～30 時間の就学時間数であるので、それに基づいて、5 単位の科目であれば、どの期間であろうと、週に何回、講義であろうと、国によってそれが違ったとしても、学生が実際に勉学に費やした時間数は、125 時間～150 時間であることが分かる。その意味で、ECTS と Learning Outcome の併用は、就学期間が簡単に算出でき、また、教員にとっても 5 単位相当の科目では、講義、宿題、レポート等にとどの程度の時間配分が必要か決定するのが容易になるという意味でもカリキュラムの質保証にとってもよい影響を与えることが予測できる。

VI. ECTS と Learning Outcome が抱える課題

1 教員と大学の自治権の崩壊：近年の ECTS の普及は、各国政府の主導で各国の法規命令 (decree) 等によって半ば強制的に制度化されている。それは、多くの大学や教員に急速なカリキュラム改訂作業をもたらし、時間的に多大な負担をかけた。そこで懸念されるのは、学科のカリキュラム開発並びに授業内容、そして教授法に関する大学並びに教員の自治権が崩壊する可能性があることである。しかし、実際には、大学も教員も複雑な感

情を持っており、自治権の主張はあるものの、それは Bologna Process 自体を否定するものではないことも確かなようである。¹⁶ 寧ろ、すでに多くの大学では、カリキュラムや教育内容に関する改革の必要性が、論議されており、Bologna Process による改革は、多くの学長や改革派の教授陣を後押しする形となった。しかし、多くの国立大学は、国際的に魅力のある大学像を創造しようと Bologna Process に積極的に対応したが人事異動や雇用に関しては、多くの政府が柔軟な姿勢を示さなかったため、独自性を出し切れなかったことに関し不満を残している。¹⁷ また、ECTS の法規命令は、ここ数年で出されたものが多く、急速な改革を強いられた高等教育機関が多かったため、時間的な拘束に対する批判も多かった。

2 ヨーロッパの高等教育の画一化：Bologna Process の推進により今まで培われていたヨーロッパにおける文化的違いが破壊され、個性のある高等教育が非常に画一化された教育になってしまわないかという懸念がある。特に、TUNING プロジェクトが Dublin Descriptors¹⁸ に準じた分野ごとの Learning Outcomes をスタンダード化し、それを各国の政府が1つの水準として適応した場合、大学の独自性が損なわれ、個性ある教育ができなくなる可能性がある。その一方、ヨーロッパのどの大学で学位を取得しても1つの教育水準に基づいた教育が受けられるという質保証が確保されるのも事実である。教育大臣会議は、それらの規程は、あくまでも最低限必要なレベルの教育の質保証であり、それらの基準以上のレベルで独自の教育を行うのは、全く問題がないと提唱している。

3 高等教育の職業教育重視主義 (Vocationalism) 化：Learning Outcome をシラバスや教育プログラムの案内に載せることは、技術訓練系の高等教育機関ではすでに一般化しているが、アカデミックな教育分野にも導入した場合、カリキュラムが実践的な側面ばかりを強調したような教育内容になってしまい、伝統的なアカデミズムの知識の習得が困難になる可能性がある。さらに典型的なアカデミズムの分野である哲学や歴史と言った教育プログラム自体が軽視される可能性もある。今回の Bologna Process の1つの重要な目標は、社会にとって魅力的な人材育成、employability の向上にあることから、高等教育の Vocationalism は、寧ろ自然な成り行きなのかもしれないが、大学におけるアカデミズムを今後どう維持し、発展させていくべきかということも検討される必要があろう。

4 普及の問題：ECTS と Learning Outcome の大きな課題は、それらの活動が正しく利用されヨーロッパ全体に普及していくかという点である。ECTS は、確かに学生交流を通じて普及していった。しかし、実際には、workload による単位数の換算ではなく、いまだに contact hour (授業時間数) による換算が行われているケースが非常に多く、workload に基づく ECTS を活用している教育機関は、ヨーロッパ全体では非常に限られている。¹⁹ その現状を少しでも打破しようと欧州委員会が推進している ECTS label Institution の認定制度でも2年目にしてまだ14大学しか認定されていない。Bologna Process では、多くの政府が法令化によって、ECTS を普及させようとしているが、今後 Tuning プロジェク

トが計画しているような各科目、各教育プログラムでの ECTS や Learning Outcome への取り組みを要求した場合、大学関係者に対し膨大な負担を強いることは明らかであり、実際にどれだけの大学や教員が、通常の教育・研究をしながら、それらの改革に着手できるのかは、非常に懸念される。

5 高等教育の不均衡化：最後の課題は、いくらヨーロッパ全体で同時に改革を進めるとは行っても、実際には国家や大学間の財政、人材、地域性の格差によって、その改革に対応できる余力を持った国家、大学だけがより魅力的な教育プログラムの構築に成功し、同時にヨーロッパ全体が ECTS や Learning Outcome を積極的に採用することによって、学生が移動しやすくなり、特に大学院教育がそれらの一部の国や大学に集中するようになるのではないという点である。もし、そのような傾向が続いた場合、地元の学生が大学院まで残らず大学が定員割れを引き起こし経営難に陥る可能性は、十分に考えられる。ヨーロッパでは多くの大学は公立である以上、こうした学生の偏りが深刻化した場合、受け入れる国も学生を失った国も国家予算への財政的な負担の増加が見込まれ、ヨーロッパ全体の大学経営方針に大きく影響する可能性がある。

VII. 結語

今回の調査では、ヨーロッパの4カ国で欧州委員会 (EC)、ERASMUS 国内代表事務局 (National Agency)、そして合計13校の大学を訪問し、特にその中でも昨年、欧州委員会が正式に認定した ECTS を全学的に制度化し全ての科目を英語で情報公開している ECTS Label Institution の13校のうち3大学を訪問できたので、ヨーロッパにおける最先端の ECTS 利用状況が把握できた。また、現在、欧州委員会の全面的支援を受け、大学の教員が中心となって推進している Tuning プロジェクトについては、そのプロジェクトを手掛けた2人の専門家と会談することができ、ヨーロッパの高等教育が目指す質の均等化と国際的競争力の強化の方向性が把握できた。

ECTS は、学生交流のための単位互換制度として90年代にヨーロッパ諸国全体で普及した制度であるが、実際には、15年以上たった現在も全学的に利用している大学は、それほど多くない。2004年から始まった ECTS Label Institution の認定制度は、そうした状況を鑑み、欧州委員会が ECTS をヨーロッパの正規の単位制度として普及するための重要な政策の1つである。そして Tuning プロジェクトは、各分野における高等教育を段階ごとに Learning Outcome によってスタンダード化することにより、ヨーロッパ全体の高等教育の質の均等化を図っている。

こうした ECTS の単位制度化、そして、Learning Outcome による教育内容の均等化は、ただ単にヨーロッパの高等教育制度を均等化し国際的にその質保証を向上させるだけでなく、高等教育の「単位制度」自体の存在意義を再度、根底から問いただし、ECTS が Learning Outcomes と連携することにより、単位数がそれぞれの Learning Outcome に対応して授

業時間数や内容の配分を構成する重要なフレームワークとなる、今までにないカリキュラム開発の手法を構築しようとしているのは、日本の高等教育制度の今後の発展にとっても注目すべき点である。しかし、そうした教育改革が実際には、大学の自治や独自性を喪失させたり、理想としていたシステムへの転換を困難にさせたりする可能性があることも十分に認識しつつ、今後のヨーロッパにおける教育改革の動向を観察していく必要がある。

-
- 1 European Credit Transfer Scheme (ヨーロッパ単位互換スキーム) の略称。
 - 2 本調査は、文部科学省の大学教育の国際化推進プログラム「平成16年度 海外先進教育研究実践支援プログラム」の支援を受け、実施された研究調査である。
 - 3 Diploma Supplementとは、学位取得のために履修した全ての科目に関して短い解説文が書かれている一種の成績証明書のことである。
 - 4 Learning Outcomeとは、学生が授業や教育プログラムを修了した時、習得しているはずの学修成果のことである。
 - 5 欧州委員会教育文化事務局高等教育、SOCRATES-ERASMUS 担当局長(以下、SOCRATES-ERASMUS 担当局長) 面談, 2005年2月15日。
 - 6 European Commission Directorate-General for Education and Culture, Gateway to Education, SOCRATES, European Community Action Programme in the Field of Education (2000-2006) , Luxembourg, Office for Official Publications of the European Communities, 2000, p.5.
 - 7 The Bologna Declaration on the European Space for Higher Education : an Explanation, Brussels, the Confederation of EU Rector's Conferences and the Association of European Universities (CRE), 1999, 10 pp.
 - 8 Bologna Follow-up Group, From Berlin to Bergen : General Report of the Bologna Follow-up Group to the Conference of European Ministers Responsible for Higher Education, Bergen, 19020 May 2005, Bergen, Norwegian Ministry of Education and Research, 2005, p. 9.
 - 9 Genetic competence は、社会生活、また将来の職場において要求される基本的且つ実践的な能力を意味し、具体的には、チームワーク、コミュニケーション能力、発表能力等を指す。
 - 10 Subject competences は、専攻する分野ごとに必要とされている基本的且つ実践的な能力を指す。
 - 11 SOCRATES-ERASMUS 担当局長面談, 2005年2月15日。
 - 12 Credit System for Accumulationとは、ECTSがERASMUSにおいては、Credit System for Transferであったのに対し、Bologna Processでは、学位取得のために必要な卒業単位数として取得した単位が加算されていくことを意味している。
 - 13 ESIB (The National Unions of Students in Europe), Bologna with student eyes: ESIB Bologna Analysis, Bergen, 2005, pp. 43-45.
 - 14 SOCRATES-ERASMUS 担当局長面談, 2005年2月15日 : デウスト大学 (University of Deusto) 国際

担当副学長面談、2005年3月22日。

- 15 アントワープ大学 (University of Antwerpen) 国際部 ERASMUS 担当面談、2005年2月16日。
- 16 Sybbille Reichert and Christian Tauch, Trends IV: European Universities Implementing Bologna, Bergen, European University Association, 2005, pp. 41-42
- 17 Ibid, p.44.
- 18 Bologna Processの一環として、the Joint Quality Initiative が3つのサイクル (学士、修士、そして博士課程) ごとの教育成果について定めたガイドラインであり、2004年10月18日に最終的な答申が提出された。しかしそれは、サイクル (教育課程) ごとに定めた極めて大まかなガイドラインであった。
- 19 ESIB, pp. 42-44. ; Reichert and Tauch, p. 21.